

3月例会報告

【日時・会場】 2003年3月25日(火) 19:00～ 筑波大学附属高校体育館ミーティングルーム→～0:00 カリнка

【参加者(会員)】 浅野智嗣(JSA) 上間匠(東京大学院修士課程) 中塚義実(筑波大学附属高校) 中村敬(元サッカースクールコーチ) 橋本潤子(スポーツライター) 依藤正次(横浜スポーツコミュニケーションズ)

【参加者(未会員)】 梅澤佳子(短大教員)

注) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

ある地域のスポーツ環境の現状と今後の展望

中村敬(元サッカースクールコーチ)

<目次>

<1>はじめにーはじめにー本テーマの考え方・捉え方

<2>今回フォーカスする地域について

1. 東京都〇区A町について
2. A町周辺のスポーツ環境について
3. 行事単元

<3>その地域でのスポーツの多様な楽しみ方

ー「する」「見る」「語る」「支える」をキーワードに解決策を探る

1. W杯時の活動事例・報告
2. 今後の構想

<4>ディスカッション

<1>はじめにー学校体育におけるサッカーの位置づけ

◆総合型地域スポーツクラブの創設が叫ばれる中、その地域の地域性や社会資源を見ることなく、上から下りてくるマニュアルのようなものを、地域に当てはめてしまうような感があり、危惧している。

今回は、一地域での実際のスポーツ環境・社会資源・問題などを挙げ、そこでの新しいスポーツ環境構築について、スポーツを多様な視点で一緒に考え、解決策を探る。またそこを出発点として、日本のスポーツの未来につなげていきたい。

◆導入ー事例紹介：千葉市若葉区の福祉施設からのアイデア・実践より

身体障害者療護施設(重度身障者の入所を中心とした施設で、発表者が関わっていた)と近隣保育所の間での、スポーツを通じた交流イベントの様態を、ビデオを用いて報告した。

- 施設内の、ほぼ一年中使われない芝生の中庭に園児を呼んで、園児には「する」こと、施設利用者には、子ども達が元気に走り回っている姿を「見て」、「応援して」楽しんでもらうことを中心とした企画。
- そこに資源となるものがあるならば、福祉施設からのスポーツ環境づくり、クラブづくりという方向性もあるのではないか

<2>はじめにー学校体育におけるサッカーの位置づけ

1. 東京都〇区A町について

- 「場所」：一般的に言われる下町にある
- 「歴史」：1657年の明暦の大火（振袖火事）後に形成された地域。震災、戦災ともに最も被害の大きかった地域、復興の歴史を経て現在に至る。周辺には史跡が多く存在する。
- 「文化」：隅田川文化、路地文化、職人文化、相撲文化、下町人情
- 「産業」：個人商店、町工場（メリヤス、繊維、紙、金属）
- 「経過」：ここ30年で、マンションの乱立、新住民の増加、産業の衰退（町工場の減少）、路地、銭湯、赤提灯の減少 ⇒ 「共有物」の減少 ⇒ 地域コミュニティの衰退

- 「文化」もかなり壊れてきており、「歴史」も急速に進むまちの変化に、隠されてしまっている

2. A町周辺のスポーツ環境について

◆全体から

- スポーツ施設の核となっているのは小学校の校庭。（トラック一周100m程のアスファルトの校庭、740㎡の体育館、25×10㎡のプール）任意団体のテニス、少年サッカー、少年野球、バドミントン、体操などのクラブが活動している。
- 近くのコミュニティセンター内には、多目的スタジオ(約100㎡)があり、そこでダンス教室や空手教室などが開かれている。その隣にはトレーニングルーム(約100㎡)が設置されていて、フィットネスクラブと同じように、個人的に汗を流しに来ている利用者がいる。
- 上記の任意クラブやサークルは、ここ20～30年の間に設立。
- 歴史…相撲文化の存在。50年程前は、「地域」と「相撲部屋・力士」の間に壁がなかった。相撲部屋・力士が地域に支えられ、住民はそれを共有し、近くで活躍する力士の姿を見ていた。相撲部屋を中心としたクラブライフに近いものも存在していた（現在は相撲部屋・力士は、地域からかけ離れた遠い存在となっている）。
- 現状…現在地域にある任意クラブ・サークルそれぞれ交流関係はなく、すべて単一種目型クラブで、ほとんどが類似年齢で構成されているクラブ。基本的に「する」のみのスポーツ環境。

◆ある少年スポーツクラブから

- 中村敬が所属する少年サッカークラブの現状：(1984年設立)

子どもの数(1年～6年)は約 55 人、コーチの数 8 名(内 6 名お父さんコーチ)

活動拠点は A 小学校校庭

《現状》偏ったスポーツ観・コーチング観によるクラブ体制

例) プレイ観のないスポーツ観、閉鎖的なクラブ体制、各コーチの知識・技術・意識の不統一、他文化クラブへの参加を認めない体質、旧スタッフと現スタッフの接点なし、など。

以前には、スポーツ観やコーチング観について説明させてもらったこともあったが、理解し難かった様子が強く伺えた。その後は呑みながらのコミュニケーションを重ねている。

《プラス要因》

試合にこられる親御さん方の盛り上がり ・ 3つの学校からのクラブ員構成

お酒が好きな人多数→語る楽しさを知っている ・ 来年でクラブ創設 20 周年

一生懸命なお父さんコーチ ・ OB、親御さん中心のユース以上の多世代チームスタート

半数以上のお父さんコーチにコーチング、スポーツに対する考え方に大きな変化有り

<3>その地域でのスポーツの多様な楽しみ方ー「する」「見る」「語る」「支える」をキーワードに解決策を探る

1. W 杯時の活動事例・報告

◆自宅 2F のスペースを利用して、地域住民対象のパブリックビューイングの開催

◆中村敬を中心とした地元のサッカー仲間が主体となり開催。4 日開放し、6 試合放映。準備として、近所への協力をお願い、広報配り、ポスター貼り、看板貼りなど。参加は無料だが何らかの Give&Take を原則とした。

【目的】

- (1)W 杯を見過ごすのではなく、参加し、体感する。
- (2)スポーツの「する・見る・語る・支える(応援する)」という楽しさを感じてもらう。
- (3)地域交流
- (4)地域レベルにおいての国際交流
- (5)サッカー・スポーツのすばらしさを皆で共有・再発見する。

◆結果、近隣からの物心両面の協力などもあり(大型テレビ提供、ビール、つまみなど)、参加者の人数・構成も予想以上で、大いに盛り上がった。試合中は知らない人同士がニッポンコール・ハイタッチ、一つになれた。試合が終わったあとの時間もとても素晴らしかった。お互いの壁もなくなり、女子高生とおじさんが楽しそうに会話している光景なども見られた。現在そこで生まれた関係は、一部で多少なりとも継続している。単発的なイベントではあったが、上記の目的はある程度達成できたと言える。

2. 今後の構想

◆自宅 2F のスペースを利用し、住民の誰もがスポーツに触れられるスペース（クラブハウス）を創る、そこからのクラブづくりをめざす。

◆目的としては、「スポーツを楽しむ新しい環境」と「新しいコミュニティ」の創造。

◆立地としては、小学校まで徒歩 3 分、コミュニティセンターまで徒歩 4 分、裏に図書館公園があり、人の流れる場所にある。では、どのような機能を持たせ、そこに人が流れ入るような仕組みをつくるか。スポーツをする前（更衣・健康管理・ロッカー等）・後（シャワー・更衣・交流・ミーティング・健康管理等）の環境、地域の溜まり場としての環境（軽く呑める・食べられる）、スポーツを気軽に見られる・語れる環境、オセロ、将棋、ベーゴマ、トランプなど遊べる環境、スポーツの情報が流れている場・発信する場としての機能、地域スポーツのマネジメント機関としての機能を持たせる。（それらを CG 化したものをビデオで説明）

◆そこを設立、運営していくために、小学校やトレーニングジム及び、多目的スタジオで活動している人や団体、または住民、近くの相撲部屋などに呼びかけ、最終的にはクラブとなるような仕組みをつくっていく。

◆住民主体でこの環境を創っていくための、核となる仲間を集めるにはどうしたらよいか。何回かイベントのようなものを行い、スポーツの多様な楽しさを広めることや、足がかりとなるきっかけづくりが必要。例えば江戸開府 400 年イベントや所属少年スポーツクラブ創立 20 周年記念イベントをきっかけにするなど。またもう一度社会資源を把握し、様々な市民団体・企業・人材とつながり、の協力関係をつくっていくことが必要。

◆アイデアとして、近くの相撲部屋を応援する、固い校庭を活かし車椅子スポーツを普及させるなど

<4>ディスカッション（要約編。詳細は後述）

◆スペースからのクラブづくりは何のためにやるのか？

→（住民自身の）ニーズが必要

ではニーズを生み出すためには？

→ そのスペースで（W 杯イベントのような）事例を重ねることが必要

まわりからまずは意見を聞き、話せる態勢・機会をつくる、増やす 何らかのソフトにより、スポーツをする人だけではなく、まわりの人がそれに関心を持つ仕組みをつくる

◆違う方向性から → いきなり総合型でなく、まずは一種目で引退をなくし、多世代型へ

（他の種目も OK というスタンスを持っていればそこから広がる可能性もある）

地域の様々な活動に少しずつでも顔を出し、関係をつくる、理解を得るところからはじめる。

地域だけではなく、様々な情報、視点を持つ。

<感想（中村敬）>

クラブづくりの要素として、その外枠（クラブの規模やクラブハウス、スポーツ施設などの機能）だけではなく、クラブ員意識につながる「内面的な部分へのアプローチ」をどうするか、ということが最も重要なのだということが明確となりました。そしてこれというのはこのような機能を作ったから、こうなるというのではなく、細かいアイデア・アクションや、細かいところまで気を配った人とのやり取りなどの積み重ねにこそ、生まれてくるのだと理解できました。今回自分の発表に一番足らなかったところであるし、これから実践していかなければならないことであります。より良いスポーツ環境構築、それをかたちだけではなく、文化としていくためには、人の内からでてくるものに働きかけていかなければなりません。ならば、それは短期間でできるものでもありません。

私事ですが、今後地域に対し、長期的な視点で諦めずに活動していくことが、私のサロンに対して、または社会に対しての **Give** なのだと感じています。発表としては視点も甘く、皆さんに **Take** を求めているだけのものだったかも知れませんが、報告書づくりまでを通し、自分を客観的に見ることが出来たのも大変な収穫となりました。

今回の例会にて、提案者として発表させていただいたことに感謝致します。

<4>ディスカッション（要約編。詳細は後述）

1. 所属しているサッカークラブについて

○ お父さんコーチの目覚しい変化、その経緯というのは？

中村 自分の考えなりを書面を通して出した時（約3年前）には、理解を示した人もいましたが、現場において変化はなかなか見られませんでした。その後変わってきたのは、呑みながらのコミュニケーションの回数を重ねた事が良かったのではないかと思います。それと自分が担当しているチームが優勝した事も大きかったかもしれません(結果により見る目が変わった)

○ 学年ごとにチームを組んでいるのですか？

中村 学年ごとは、人数がいらないため組めません。

○ 地域で子どもが強いチームへ越境するというのがありますか？逆に「あそこのクラブへ入ってしまうと負担がすごいので大変なことになってしまう」などのお母さん同士のネットワークはありますか？

中村 他のクラブが強いから越境するというのはないですが、あっちのクラブは「ああなのよ、こうなのよ」というお母さんネットワークは存在します。

○ 少年クラブへのお母さんのかかわりは？例えば、練習当番や試合日のお弁当買出しなどは、どうですか？

中村 練習当番、試合日の買出し、お茶係などそれなりの負担はありますね。

○ 板橋区で30年くらいやっている少年チームがあって、地元の運動好きな子が入っていますが、土日にコーチの弁当を（お母さん方が）つくらないといけない、お茶当番やらないといけない、遠征につきそわないといけない、というのがイヤで入らないという話が結構あります。

○ 清水の話でもありました。神奈川もそうです。お母さんの理由で、親の理由で子を入れないとか、あちらのクラブに入れるというのがあります。お母さんネットワークにより、子はサッカーをしたいのに出来ないようなこともあります。どこでもそうです。現状を打開するための話し合いが一切行われないうところが問題なのではないでしょうか。

2. クラブハウスからのコミュニティについて

○ 「クラブハウス」と言ったり「人の交流」と言ったりしても、大人だけとか子どもだけとか、コーチだけとか、本当の意味で交流出来ていなかったら、こういう構想をつくってもまた同じになってしまうのではないかなど、聞いていて思いました。

○ サッカーとずれてしまって申し訳ないのですが、地域のネットワーク、例えば町内会的なものが強いのではないのでしょうか？昔からの。

中村 強いのですが、その集まりは昔からの人だけです。新しい住民が大変増えてきているのですが、そこでの交流は全く見られません。その強いネットワークにいる人たちは、ここがまだ下町だと思っているところもありますが、私自身は"元"下町ではないかと思っています。

○ 新しい人たちと古い人たちがこのクラブに集まって、近くの相撲部屋を応援することで一体化できたり、理解できたりということにはなるのでしょうか。そういう視点がすごく欠けているのではないのでしょうか。こういう機能があったらいいなという外枠のところはすごく整っていますが、ここに住んでいる住民の人が必要としているのかというのがわかりませんし、これによって何が変わるかというのが全く見えません。もちろん楽しいのかもしれませんが、それによって地域の交流が広がったということに結びついていけるものとも思えません。そう考えると、いろいろなところに広報活動や協力と言っても、先ずそういったところがきちんと見えないと、メリットがないととられてしまう。住民のニーズだけでなく、何のためにやるのかというところで、スポーツで楽しもうというだけではダメなのでしょう。

中村 ニーズのところですが、確かにコミュニティといったところで、それが住民のニーズであるかと

いうとそうではないと思います。新しく来た人の中には、つながりが薄いことは感じているかもしれないけど、そこからニーズになっているかは（今の段階では）分かりません。ニーズになりうるかなとは感じています。

○ 「かもしれない」というのではなく、それがどうかというのを実際に調べないとニーズとは言えないから、そこから始めないといけないのではないのでしょうか。

○ そういうように最初思いましたが、中村さんの話には強みがあって、箱があることなんです。箱があることで、極端な言い方をしたら、アイデアがなくなっちゃって、例えば W 杯のような事例を幾つか重ねていくことで、ニーズというものは自然に生まれてきちゃうような気がします。こういうことをやろうとしている人は結構いますが、箱がなくて断念するケースが多いです。そういう意味ではたくさんのアドバンテージがありますね。

3. 都内民間テニスクラブ（世田谷区）の事例から

○ 私の知っている事例（民間テニスクラブ）を紹介します。テニスの好きな地元の方が、ご自分の所有する土地を利用してテニスクラブをつくりました。テニスコート 4 面、クラブハウス、子どもが遊べる公園を作って、地域の人が年中出入りするようになりまして、大変盛り上がったけれど会員が高齢化するとおもに縮小してしまいました。中村さんの話聞いていたら、そのクラブの事例を思い出しました。私自身も中学生からクラブのテニス教室に通い、両親と一緒にプレイしていました。同様に会員の子どもたちもたくさん来ていました。料金も安い、決して高級テニスクラブではありません。ゆとりのある経営者が趣味でやっているというような所です。なぜ衰退してしまったのかなと考えると、やはり「テニスをする」ことを中心としたサービスをみんなで楽しんでいて、それ以上のネットワークにつながらなかった。夏合宿、試合への出場、クラブ内大会等で完結。豊かなクラブライフを意識的にプロデュースしていないと、箱（施設）があっても「するスポーツ」の広がりにつながっていかないのでは。スポーツ以外での地域のコミュニティにどうアプローチしていくのか、その辺がすごく重要なのではないかと思います。

○ 私もそう思います。箱があるのは確かにアドバンテージですけど、それは今までも行政がやってきたことです。いろんな箱を作ったけれど、そこから盛り上がっているかということ、もちろん盛り上がっているところもありますが、盛り上げるための何らかのソフトが必要になってくるわけですね。箱があるからというので、自然に自分たちで自発的にソフトが出来ていくことも確かにあるので、そうやっていくと上手く盛り上がっていくのかなというのがあるのですが、どういうソフトを持っていくのか、まわりの人がそれに関心を持つのかということが重要なのではないかと思います。

○ その世田谷のテニスクラブの話は次の世代の人たちにはつながっていかなかったのですか？

○ 今はガラガラで、クラブ外の方が時間で使っています。

- 軟式テニスであったところに広がらない理由があるのではないのでしょうか。
- いや、基本的には軟式・硬式どちらでも使用可能です。地域の方々が集うクラブでした。だけれどこの問題が私にとっては課題で、あれだけ一緒にテニスをやっていたのに、「クラブ」が成熟しなかった。一体何だったのだろうという気がしています。
- それというのは、要はその場所では、テニスという種目だけのコミュニティであって、それ以上そのメンバーが広がっていかない。テニスを「する」こと以外に広がっていかなかったということですよ。ね。
- 基本的にテニスをする以外に広がりませんでした。会員の仲はよいので四季折々のイベントを楽しんでいました。クラブハウスには冷蔵庫にはビールなんかも入っていました。
- 新しい人が入る時はどうしてたのですか？
- 結構入ってきていました。結局その年齢の人たちが高齢化して縮小してしまったのかなあ。
補足：答えになっていませんので補足しますと、大会の参加でクラブ存在を知った人や口コミでテニスクラブの教室に参加し、会員になるというパターンです。経営者の方が好きでやっているクラブですので民間のクラブのような営業意識はありません。
- 新しいメンバーの人はどうやって入ってくるのですか？何か募集か何かはありました？
- ご近所の口コミだけ。ただ硬式が本当にやりたい人、サービスを求める人は施設設備がしっかりしているテニスクラブを選ぶと思います。
- それというのは、立ち上げ時期の人たちの仲良し「チーム」だったということですよ。その人たちがあがっていくと一人抜け、二人抜け、そして次がないという。たぶんそこで育っていたのは「クラブ」ではなくて「チーム」でしかなかったのではないのでしょうか。

4. 神戸外人クラブ (KR&AC) の事例から一クラブハウスのあり方

- 神戸外人クラブ (KR&AC) は、ラグビーあり、もともとのレガッタがあり、サッカーもありのいろんなチーム (部門) で多世代型のクラブなのですが、皆が集うクラブハウスがあります。狭いところに4~5階建ての、作りは古いのですが「これがクラブハウスだ」といえるようなものでした。レストランがあって、その脇には、ベーゴマじゃないですが、ダーツのコーナーがあって、遊べる。感心するのは、歴代高得点者の名前がちゃんと飾られていて1960年代くらいからの高得点者がありました。クラブハウスのいたるところに歴史がちりばめられていました。

○ 欧米のスポーツクラブの「見せ方」だとか、クラブ員に対して精神的なもの、暗黙のうちにクラブ員であるというようなものを感じさせてしまうような、いろんな装置がないといけませんね。

○ 中村さんの構想は最終的にはクラブを創るという感覚ですか？最終的には総合型ですか？

中村 はい、どこまで総合というのは決めてないんですけど。

○ 多種目クラブですか？

中村 はい、でもそれもいっぱいなくてはいけないとは思っていません。

○ スポーツではなくてもいいのですよね？

中村 ええ、最終的には文化サークルも、とは考えています

○ そうなってくると、その地域にはコミュニティセンター内にスポーツ施設がありますよね。コミュニティセンター機能があるところでスポーツができる

中村 確かにそうなのですが、コミュニティセンターは地域住民の中心としての機能はしていないと思われまます。

○ コミュニティセンターと町内会、自治会、公民館というのはどういう図式になっていますか？みんなはどこに関心を持っていますか？かなり世代によって違うと思いますが。

中村 コミュニティセンターはできて10年くらいなので、昔から住んでいる人はあまり意識も関心も示していないように思われます。やはりそれよりは町内会、町会会館への意識が強いです。新しい住民の人はどのように思っているかは分かりません。おそらく町会会館のこともなんとも意識していないのではないのでしょうか。

○ コミュニティセンター内にはトレーニングルーム、スタジオ以外に何があるのですか？

中村 1Fに派出所、2Fに畳で障子張りの集会所のような、民謡もやっているのかな。あまり分からないのですが。3Fあたりには音楽をやりにくるスペースもあります。

○ コミュニティセンター内に人は集まってきているのですか？

中村 人は集まってきてはいるのですが、それぞれひとつの目的のためにそこに行くだけで、お互いの

コミュニケーションは全くないです。

○ (今回のクラブハウスというのも) 同じものになってしまわないですか?何か違いを出さないと。

○ コミュニティセンターについて伺ったのは、そこを有機的にしていく方法もあるのではないかと思ったからです。既存のコミュニティセンターを活性化しながら、中村さんの施設とつなげていくとか、地域の方とつなげるとか。コミュニティセンターは情報が集まり発信しているような場所ではないのでしょうか。情報があるところには、人は集まると思うし。

中村 (コミュニティセンターは)住民が情報を出したり、情報をもらいにいたりするようなスペースにはなっていないですね。

○ それは残念ですねえ

5. クラブづくりの試案-単一種目多世代型から多種目へ

○ クラブハウスってやっぱりクラブがないと成り立たないじゃないですか。議題から反れちゃうのですが、せっかく少年サッカークラブのコーチをやられていて、さらにOBチームも出来てきたのだから、そこでそのクラブを上まで含めてずっとつなげていって、今の30代40代の方たちが例えばオーバー60になって大会出たら素晴らしいではないですか。とりあえず知らないスポーツをやっても分からないのだから、サッカーから入っていって、サッカーだけじゃないよというスタンスを持っていけばいいわけで。やりましょうよオーバー60、私入りますよ。(笑)

中村 (笑)最初は自分も、この少年サッカークラブから広げていきたいなというのを考えていたのですが、書面で自分の考えを出した時に反発が強くて、理解もなかなか示してもらえなかった。これは難しいなあと思い、今回出したような考えを持ったのですが、この3ヶ月、お父さんコーチ(含めクラブ)がほんとに変わってきているので、確かにやはりそっちからの方が可能性はあるのかなということは思っています。

○ その地域で多種目を集めるというより、隣の地域も入れてしまってサッカーで集めるというほうが、今ならイメージ湧くのではないですか。例えば高校生でも練習終わったあとに、シャワー浴びるところとか、お茶飲めるところとかないですよ。クラブハウスがないわけなのだから、そちらの方がイメージ湧いてきませんか。最終的にはサッカーだけの排他的なものにする必要性はないのですから。そういう意味でも箱があるのは強いなと思うのですよね。

○ 中村さんの出発点は、昔ながらの下町風情みたいところが先ずあって、エリアを広げるよりはむしろ、徹底的にローカルにこだわりたいというのがスタートにあったのではないですか?

中村 それはありました。けれど今の話聞いて、今まで全然考えていなかったアイデアなので、すごく魅力的だなと思いました。確かに出発点はローカルなところではありました。でもそれは行政区画にこだわっているものではありません。

○ (そのようなかたちの方が) 中村さんの持っているものが一番引き出されるのではないですか？ そうこうしているうちに中村さんも年を取ってきて、50歳くらいなった時に町内会をしょって立つ立場になり、その時に経験からいろんなものに広がっていきますよ(笑)

○ 隣の地域も入れてというところで、クラブライフって言うのはどの程度の距離で行われるものなのかなって思ったのですが。あまりイメージがつかないので。

○ 僕のイメージで言ったら歩いていけるところ。それ以上広げちゃうとなんかよそよそしくなってしまう。地域コミュニティと全然違う話になってしまう。思いつきなのですが、そういったようにして4チームでそこを使ったとしますよね。そしたら、4チームで合宿やったら安いですよね、4チームでグラウンド取りをやったら、すごく効率がいいですよね。ということで一つの種目の方がメリット出てきませんか？

○ 僕もね基本的に総合スポーツクラブといったときに、多種目といったところに広げるのってなかなか難しそうだなと思う、むしろ単一種目多世代型、この方が手っ取り早いかなと思っています。引退を無くせばすぐ多世代型になりますから。

○ それはすごく羨ましいですよ。今のサッカー環境だと50歳過ぎるとボール蹴れる人ってなくなって。ボールが蹴れないのではなくて蹴れる環境がありません。蹴れるコミュニティがありません。

○ (中村さんの地域で) 銭湯はなくなってしまったのですか？

中村 今はかなりつぶれていて。以前はかなりあったんです。そこら中に入ったんですけど、いまはA町周辺ですと2つぐらいです。

○ 前に(出張サロンで)刈谷へ行ったときに、サッカーの町だからそこら中でサッカーをやって遊んでいまして、サッカーのあとは、刈谷温泉と言うスーパー銭湯のちょっとミニチュア版みたいのがあって、そこへ集まってくるんですよ。サッカーオヤジからサッカーニイチャンまでが。そこにクラブハウス機能を持たせれば最高だと言う話をしてたんですけどね。やっぱり日本人お風呂好きじゃないですか。サッカーやって、お風呂入って、ビール呑むっていうゴールデンコースは大事にしておきたいなと思っているのですが(笑)

○ でしたら、手っ取り早く自分のやっているサッカークラブの人たちを中心として、定期的にそこでサッカーを見る会みたいなものやっていくことが先ず先なのではないでしょうか？ それでお酒が入れ

ば話を通るといふのがあつたのだつたら、そういう機会いっばいつくらないといけないのではないか、という気がします。先ず一番身近な人が説得できなくてこのような大きいことは出来ないのではないのでしょうか。もうすこし話し合いをするなり何なりでちゃんとしたコンセンサスを持っていけるようになったほうがいいのではないのでしょうか。

○ ちなみにもっと身近な親の説得は出来ているのですか？

中村 どこまでかはわからないですが、ある程度理解は示しています。

○ いろいろな世代の人たちと集まってもらいたければ、先ずお父さんコーチといろいろ話をするところから進めていくことがいいと思います。私も結構少年クラブと話とかもしたことがあるので、勝つことにこだわるといふのは非常に気持ちは分かるのですが、でも彼らには彼らの言い分があるわけその辺をきちんと聞いてあげて、理解してあげるべきではないかと思うし。こちらにはこちらの言い分があるけど先ずそこから、きちんとやつたほうがいいのではないかと思いますよ。

6. 伝統的なコミュニティの仕掛け事例から

○ 今中村さんはサッカーを中心としてコミュニティのこと考えていかれると思うのですが、一つ伝統的なコミュニティの中で、スポーツがどう機能するかというヒントになればと思うので紹介します。山形の庄内平野で、能楽をずっと伝承している地域があります。そこでは子どもたちも伝承芸能（黒川能）の稽古をやります。でも子どもですから稽古は嫌なのです。そこで、出来るだけ伝統芸能を伝えようということで、小学校で週に一回謡いの稽古を朝礼の時にやるということも始めました。伝統芸能の伝承が難しい状況でも、青年会とか、おじさん、おばさんやパパたちがスポーツに盛んに関わっている集落といふのは（子ども達も）能の練習をちゃんとやるのですよね。ヒーローといふか青年会の中心的な役の人がバレーボールの練習にも出て指導して、それで「能の練習にもこいよ！」と子どもたちに誘いをかける。そういう地域は子供たちから大人まで人間関係が上手につながっている。それが私は面白いと思います。ですから古い伝統的な文化をもっている下町で、サッカーを中心にやっけていながら、伝統文化の理解を入れることで地域の伝統もつないでいく…、スポーツにはそういった機能を持っているのではないのでしょうか。ただ「能の稽古しろっ！」と言つてもつながつていかないですからね。

中村 そうですね。だから自分のところでも、相撲だつてまた大衆スポーツではないですが、あそびとして遊べる環境までもつていけなくもないですね。

○ 今そこまで視野に入れてしまうと大変なことになってしまうと思うのですが、また年とつた時に、見学会みたいなものもやつて下さい。

○ 黒川能は何百年でつたつて？

- 五百年ですね。
- 世田谷のクラブとはまた違う仕掛けがやはりあるのですね。
- スポーツの持つかってすごいなと、私は黒川へ行きながら思いました。
- 伝統芸能というのは、子供に伝えるための工夫がすごいのですよね。やっている人たちが子どもの文化のことを良く知っている。ポケモンとかに詳しくあったり。要はそういうので子供と仲良くするところから始まって、自分たちとのところに引きこもうというのでしょうか。すごく勉強している。子どものことだけでなく、テレビの芸能ネタもそうですし、スポーツもそうですし。
- 地域が文化を持っていると、逆にいろいろなものを受け入れる度量があるのでしょうか。一時、ジャズに走っちゃって黒川を飛び出した人が地域に戻ってきた時は受け入れてくれ、名囃子方になり、地域の一員として役割を与えられる優しさみたいなものがある。今の日本の都心では失われてしまったものが、おそらく中村さんの地域には残っているのでしょうか、それを上手に育てていってください。
- いい話ですねえ。それではホンワカしたいい雰囲気になったところで場所を変えましょうか。

中村 貴重な意見有難うございました。やはり話題を提供して良かったなど。自分の視点は弱いというか甘いものだったかも知れないのですがやはり出して、全く新しい意見を聞けてとても参考になりました。

以上